

千葉県における農業生産と食料自給の現状

中村俊彦^{1,2}・北澤哲弥²・本田裕子²

¹千葉県立中央博物館

²千葉県生物多様性センター

1. はじめに

平坦な地形、肥沃な土壌、温暖な気候といったきわめて恵まれた千葉県の自然条件は、豊かな生物多様性とともなそれを基にした大きな農業の恵みをもたらしてきた。2008年度農業産出額は4,216億円であり、これは北海道、茨城県に次いで全国都道府県別の第3位になる(2010年2月関東農政局統計部)。なお野菜と鶏卵はいずれも産出額は2位であった。農業生産は生態系の供給サービスとして位置づけられるが、この生態系の恵みを産業とする農業は、千葉県はもとより日本全国においてきわめて厳しい状況にある。

食糧の外部依存が約6割の日本において、日本人の食糧を支えるべき農業が厳しい状況にある現状は、持続可能な社会を目指すにおいては大きな課題である。今回は、千葉県の生態系の供給サービスの現状と傾向について農業生産と食糧自給の現状を概括した。現時点ではあくまでも解析途中であり千葉県の農業や農地・農家の実情を総括できているわけではない。今回は予報としてまとめた。

2. 農業産出額の変化

千葉県の農業産出額は1970年時点では約2,000億円であったが、その後急上昇した。1995年には4,850億円に達し、全国第2位の産出額になった。その後は減少したが、近年は微増している。

県内で生産される作物のうち、統計書で生産量の変遷を把握できる作物を、米、麦類、豆類、カンショ、野菜、果実に区分し、それぞれの農業生産指数(それぞれ最も古い年の生産量を100とした)を求めた(図2)。麦類、カンショ、豆類は、生産量が100以下に落ち込んだ。麦類とカンショ

は、ともに1960年前後にピークを迎えた後に減少に転じ、2005年にはカンショ35%、麦類5%まで大きく減少した。豆類は、1960年から減少が続いている。米と果実は、ともに1960年～1970年にかけて生産量が200%以上に増加した後、減少に転じ、現在は150%前後で推移している。一方、野菜は1955年から1980年にかけて急増し、その後は400%前後で推移している。

このような野菜生産の大幅な増加は、麦類やカンショなどからの転作や、土地利用の高度化による野菜の作付面積の増加に加え、化学肥料や施設園芸等の普及にともなう単位面積当たりの生産量の増加によるものと考えられる。

社会的地域区分(北澤, 2010)ごとにみた単位県土面積あたりの農業産出額(2007年度)は、都市化進行域(人口密度100～4,000人/km²かつ人口増減率5%以上)で最も高く、過疎高齢化地域・奥山域(人口密度4,000人/km²以下かつ人口増減率-5%未満)が最も少ない(図3)。東葛地域などの都市域(人口密度4,000人/km²以上)では、野菜と果実の生産に集中した農業

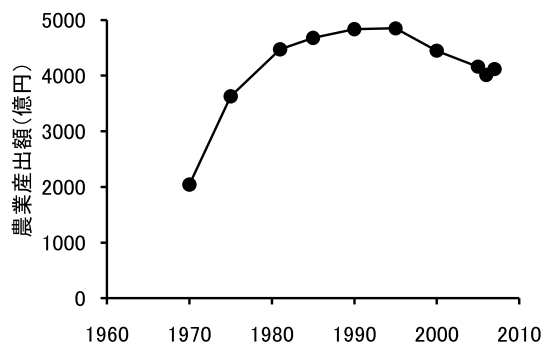


図1 千葉県の農業産出額の推移(資料:千葉県農林水産統計年報各年版)

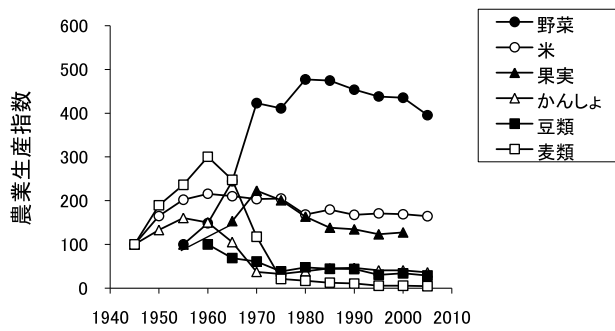


図2 農業生産指数の経年変化. 基準年はカテゴリーにより異なる. (資料: 千葉農林水産統計年報各年版)

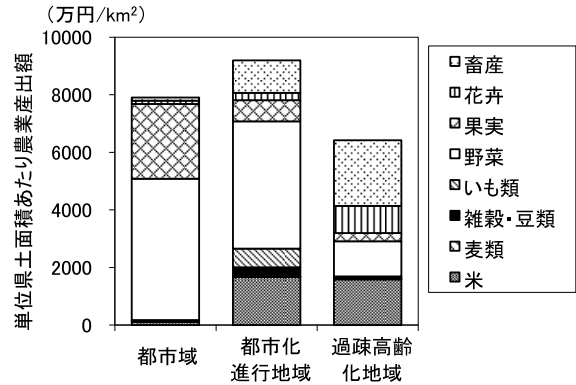


図3 地域区分ごとにみた農業産出額 (資料: 千葉農林水産統計年報各年版)

が行われている。北総地域などの都市化進行地域では、野菜と果実の生産だけでなく、米やイモ類、畜産なども生産され、産出額が高められている。南房総地域などの過疎高齢化地域では、特に畜産の占める割合が高く、ついで米が多い。また、全体の産出額は低い値にとどまっているが、多様な作物が作られている。

3. 農家・農地の変化

1950年には116万人であった農家人口は、その後、年々減少し、2005年には35万人を割っている(図4)。また、農地については、1960年に19万ha以上あった千葉県の農地は、これも年々減少し、2008年には13万haを下回っている(千葉県,2009)。その減少の要因は、かつては工業団地の造成やニュータウンの開発など開発事業によるものであったが、1970年以降は放棄耕作地の面積が増大している(図5)。耕作放

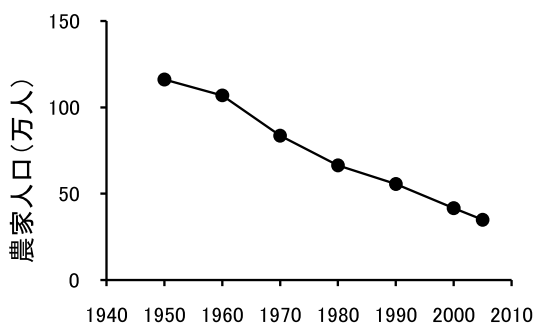


図4 千葉県の農家人口の推移 (資料: 農業センサス各年版)

棄は土地開発事業の計画とも関係するとみられるが、地域別では、都市化進行地域また過疎化高齢化地域、いずれも同様の増加状況を示した。また都市域では、1980年以降しばらくは耕作放棄地の面積の増加はみられなかったが、2000年以降にはまた急上している。

4. 食糧自給の現状

日本の食料自給率は、カロリーベースで41%(2008年度)と世界の先進諸国においてもきわめ低い。日本の都道府県別の2007年の食料自給率をみると、100%を超えているのは北海道や東北地方4県と佐賀県のわずか4県にすぎない。それに対し東京都の自給率は1%、大阪府2%、神奈川県3%と異常な低さであり、食糧のほぼ全部を外部依存している状態である。日本屈指の農業県である千葉県でさえ29%であり、全国平均の40%を大きく下回っている(図6)。

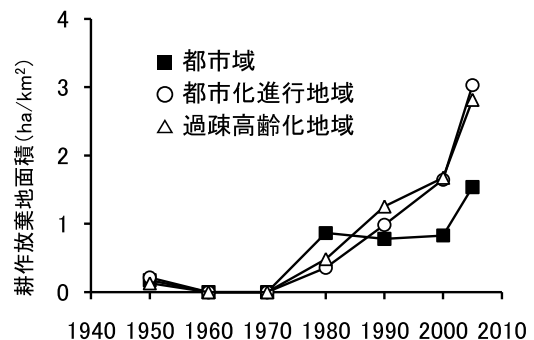


図5 千葉県の社会的地域区分ごとにみた耕作放棄地面積の推移 (資料: 農業センサス各年版)

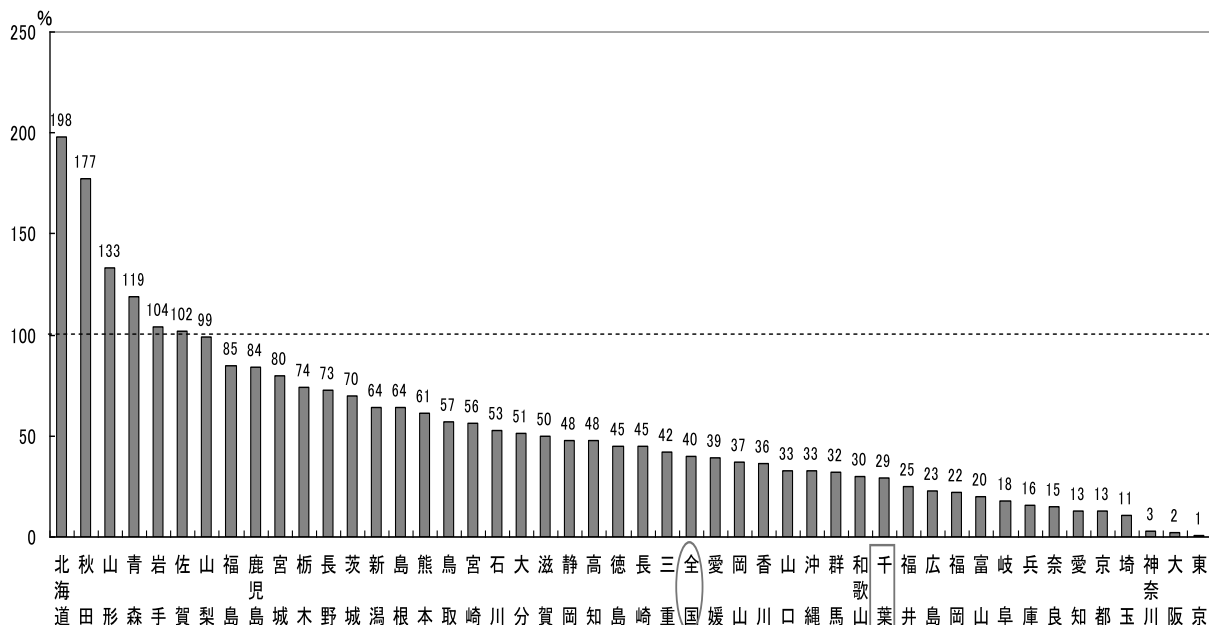


図6 全国・都道府県別食料自給率（2007年カロリーベース食料自給率）。（資料：農林水産省 HP<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/pdf/ws.pdf> 2010年2月8日確認）

5. おわりに

今回は予報とは言え、千葉県の農業の現状が概括できた。生態系の供給サービスの中心として認識できる農業生産について、千葉県の産出額は1995年をピークとし、その後は減少してきている。近年ではやや持ち直しの状況がみられるものの、農家人口は減少し、耕作放棄地は年々増加してきている。また、外国農産品の輸入増大による価格低迷や担い手不足も、厳しい日本全国の農業事情を示しているが、自然環境に恵まれ、また首都圏という大消費地に立地している千葉県の農業が下降している状況は、大きな問題である。農地が耕作放棄され食糧の7割を外部依存する状況は、持続可能な社会からはほど遠い状況である。

近代農業の発展は、かつての農業生態系に育まれた生物多様性を劣化させ、これは供給、調整、

文化にかかわる将来の生態系サービスの可能性の大きな後退であった。そのような状況にありながら耕作放棄地が増え、農家人口が減る状況は、生態系サービスと千葉県民の福利の将来に対し大きな問題であり、その解決なくして持続可能な社会の構築はあり得ない。今後、里山里海での、農業とともに漁業の実態とともに生態系とのかかわりを調査解析し、厳しい農業状況の改善とともに持続可能な社会への有り様を探らなければならない。

6. 引用文献

千葉県. 2009. 千葉の園芸と農産. 174pp. 千葉県農林水産部生産振興課.

北澤哲弥. 2010. 里山里海の生態系評価における社会的地域区分手法. 千葉県生物多様性センター研究報告2: 54-57.

著者：中村俊彦 〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館 nakamura@chiba-muse.or.jp；北澤哲弥 〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館内 千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室生物多様性センター t.ktzw2@mc.pref.chiba.lg.jp；本田裕子 〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館内 千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室生物多様性センター y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp
 "Agricultural production and food self-sufficiency in Chiba prefecture." Toshihiko Nakamura, Natural History Museum and Institute, Chiba, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: nakamura@chiba-muse.or.jp; Tetsuya Kitazawa, Chiba Biodiversity Center, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: t.ktzw2@mc.pref.chiba.lg.jp; Yuko Honda, Chiba Biodiversity Center, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan, E-mail: y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp